

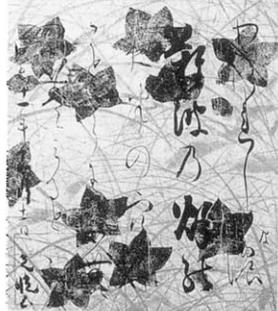
[日本の絵画と書蹟展によせて]

本阿弥光悦筆「新古今集和歌色紙」について

能筆家で知られる本阿弥光悦は、近衛信尹、松花堂昭乗とともに寛永の三筆に数えられます。霸気に溢れる信尹の書、流麗な松花堂の書に対して、線の肥瘦の変化に富む光悦の書は、豊かな装飾性に特色があります。『本阿弥行状記』に、光悦は尊朝法親王に書法を伝授されたことと記されています。実際、尊朝法親王に師事したかどうかは疑問ですが、青蓮院流から書の学習を始めるのはそう珍しいことではありません。確かに光悦の書には青蓮院流に通じる多くの要素が認められます。しかし、光悦の書にとって、それ以上に重要なのは上代様の影響です。当時は王朝文化復興の気運のなかで、古筆への関心が高まっていたのです。おそらく、光悦は特定の師につくことなく、古人の優れた筆跡を古筆から直接に学んだのでしょう。古今和歌集を書写した「本阿弥切」は、光悦が所持していたと伝えられます。

光悦の書は美しい料紙に記されることが多く、その評価を一層高めています。これも古筆の美麗な料紙に倣ったと思われる。『山上宗二記』では、下絵を定家色紙の鑑識の基準に上げており、料紙装飾がかなり重視されていたことがわかります。自分達の書にも、美しい料紙を求めたのは当然です。

1 新古今集和歌色紙 大和文華館蔵



この時代の求めに応じて、世に登場したのが俵屋宗達です。俵屋の王朝風の料紙装飾は高く評価され、慶長七年(1602)には、平安時代を代表する装飾経の一つである平家納経の表紙絵、見返絵六面の補修を任されています。

光悦は俵屋宗達によって装飾された料紙を好んで用いました。おそらく、光悦自身、宗達の料紙装飾が自らの装飾的な書風に相応しいと感じていたのでしょう。宗達下絵光悦書と伝えられる作品は、色紙、短冊、卷子などの様々な形式の料紙に残されています。大和文華館が所蔵します「新古今集和歌色紙」もその一つです(挿図1)。光悦色紙では寸法が最も大きく、縦は20cmを越えます。また、この色紙には、「慶長十一年十一月十一日」という年紀と「光悦書」の落款が記され、「光悦」の朱文方印が捺されています。同組と考えられる色紙は他に十一枚あり、ともに『新古今和歌集』巻第四秋歌上の和歌を書写しています。色紙が帖装に仕立てられたり、屏風に貼交られる場合には、その一枚に落款や印章があれば良く、このように各色紙には必要ありません。この落款、印章を当初のものとして認め、特別に大きいことを考え合わせると、これらの色紙はもともと一幅づつ

2 新古今集和歌色紙 北村美術館蔵



鑑賞するように制作された可能性があります。大和文華館の色紙には、「わすれしの難波の秋の夜半の空／ことうらにすむ／つきはみもとも」と記し、一行目の「の」の横に小さく「な」と訂正しています。宜秋門院丹後の難波江の美しい秋の夜空を讃える和歌です。十二枚の色紙に書写された和歌は、『国歌大観』の歌番号では、386、387、390～392、394、395、397～400、402に当たります。『国歌大観』の藤原定家書写本系の底本からは五首抜けていますので、色紙はもう少しあったのかも知れません。

下絵は全て金銀泥で描かれ、図様は必ずしも和歌の内容と合っていません。大和文華館の色紙の図様は下草と桔梗です。下草は二種の金泥の孤線によって描かれています。一つは針描きのように細く鋭い孤線で、もう一つはやや太く微かに中央に膨らみのある強い孤線です。この強い孤線によって、下草の構成が概ね決められ(挿図3)、細い孤線がその間隙を埋めています。これだけでも料紙装飾になりそうですが、さらに、この上から銀泥の花をつける桔梗を重ねています。桔梗では花の配置が先に決められ、後から金泥の茎と葉で花をつないでいるように見えます。この桔梗も画面全体に描かれています(挿図4)。つまり、この下絵ではそれぞれ独立しうる二つの図様をオーバーラップさせて、重層的な画面を構成しています。孤線による下草と没骨法で面的に表現する桔梗の対照は、画面に空

3 (1)の下草の構成



間の広がりをもたらしています。図様が画面から溢れ出てくるような印象さえ受けられます。

このような画面構成は、同組の他の色紙にも指摘できます。例えば、北村美術館に所蔵される色紙では、月を淡い銀泥で面画の対角線一杯に描き、その月を包み隠すように金銀泥の萩と薄を描いています(挿図2)。面的に表現した月に、強くしなる孤線で表現する萩と薄を重ねており、大和文華館の色紙とは、面と孤線の関係が逆になっています。また、メトロポリタン美術館に所蔵される色紙では、金銀泥で描いた桜花の前面を覆うように、金銀の泥と砂子で表現した雲を重ねています。この色紙では、金銀の泥と砂子の微妙な質感の相違が表現に活かされています。実に大胆な画面構成です。しかし、このような表現は絵画の伝統だけでは生まれにくいように思います。むしろ、かなり工芸的な作品と言えるでしょう。

これらの色紙を見て、思い出されるのが光悦蒔絵の代表作、国宝の「船橋蒔絵硯箱」です。この作品では、金蒔絵の船の上に重厚な鉛の橋を渡し、銀で象嵌した光悦流の文字を散らしています。ほぼ方形の硯箱を真上から眺めれば、まさに光悦色紙そのものです。素材の質感を活かし、図様を重ねる意匠構成には、今まで見てきた色紙と同じ造形感覚が感じられます。この作品が宗達下絵光悦書と伝えられる色紙作品と密接な関係にあることは明かです。(中部義隆)

4 (1)の桔梗の構成

